

# 東方紅靈錄

神無月 赤士

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

高校1年生の靈夜紅はある日幻想入りを果たす。▼幻想入りした靈夜紅の前に現れたのは巫女服を着た綺麗な少女がいた。靈夜紅はその少女から能力について学ぶそこで靈夜紅は自分の能力は使い方次第で守ることも壊すことができる能力だと知る。その力で彼はどんな道を歩んでいくのか。▼彼が能力を守るために使うのか破壊するためにはどうすればいいのか決断した時にはもうすでに幻想郷には危機が訪れていた、

目  
次

幻想入りした少年	1
紅の能力	4
初めての弾幕ごっこ	7
紅の武器	10
紅魔館	13
魔理沙ＶＳパチュリー	16
靈夢ＶＳ咲夜	18

## 幻想入りした少年

俺の名前は靈夜 紅（れいや くれない）

何処にでもいる普通の高校1年生だ。

そんな何処にでもいる普通の高校1年生の俺だが、ある日、いつもと違うことが起きていた。

その日は寄り道もしないで真っ直ぐ帰宅していた。だが、今 目の前で不思議な光景があつた。

いつもは商店街のあるはずの場所には、

何故か竹林があつた。

普通なら通らないはずない場所のはずが俺は何故か吸い込まれるかのように

竹林の奥へと進んでいった

竹林の奥へと進むとそこには神社があつた  
だがそこで俺の意識は暗闇へと落ちていった

気がつくとそこは階段の前にいた

周りを見渡してみると周りは森で目の前の階段以外何もなかつた  
俺は仕方なく階段を上つた

紅「この階段以外と長いな」

しばらく階段を上つているとようやく頂上が見えた

紅「やつとついた！」

紅がそこで休憩していると1人の少女が現れた

???「あなた一体そこで何をしているの？」

声をかけられ一瞬ビクツとした紅だがすぐに気持ちを切り替えて声の方を見た

振り向いて紅は少しの間頭の中が真っ白になつた

目の前にいたのはこの世の物とは思えないほどの美しい少女がい

た

???「何 私の顔に何かついてる？」

紅 「い、いや急に声を掛けられてびっくりしただけだ。

「ふくん そう」

「ところであなたこんなところで何をしているの？」

紅 「あ、ああ実は家に帰る途中いつもはない場所に竹林があつてその中に神社があることに気づいて

そこで気を失つたんだ」

紅 「あなたもしかして外から來た人？」

紅 「外から？ いつたい何のことを言つてるんだ？」

紅 「ここは幻想郷 妖怪や妖精神と人間が共存するところよ

紅 「そんなところがあるなんて‥‥ ところで君は？」

紅 「私？ 私の名前は博麗靈夢 博麗神社の巫女をしているわ」

紅 「俺の名前は靈夜紅 よろしくな博麗」

靈夢 「靈夢でいいわよ紅」

紅 「いやでも、初対面の女の子にいきなり下の名前で呼ぶなんて」  
靈夢 「私、博麗でなんて呼ばれないからなんだか嫌な感じがするの

よだから、靈夢でいいわよ」

紅 「わかつた、よろしくな靈夢」

靈夢 「うん！ よろしくね紅」

靈夢 「そういえば、紅はこれからどうするつもりなの？」

紅 「それがまだどうするか決まつてないんだよ」

靈夢 「じゃあ、あいつに聞いてみればいいわ」

紅 「あいつ？」

靈夢 「おくい紫」

紫 「どうしたの？ 紫？」

紅 「うお！ いつたい何処から現れたんだ？」

紫 「あら？ あなたは？」

靈夢 「こいつの名前は靈夜紅どうしてこにいるのか私が説明するわ」

「少女説明中」

紫 「なるほどね、もしかしたら、博麗大結界に何かあつたのかもし

れないわね」

靈夢 「ええ、その可能性が高いわね」

紫 「ところで、紅あなたはどうしたいの？ 元の場所に戻りたいのか、

それともここにいたいのか」

紅「俺はあつちにいても特におもしろいこともないしここに残りたい」

い」

紫「そう、わかつたわ」

靈夢「そうなると、住む場所がいるわね、どうするつもりなの紫」

紫「博麗神社に住めばいいじゃない」

紅「へ？」

紫「だから博麗神社に住めばいいじゃない」

紅「いやいやいや、そんなこと言つても靈夢が迷惑なだけじゃないか」

靈夢「私? 別にいいわよ」

紫「靈夢もこう言つてることだし博麗神社に住まわせてもらひなさい」

い」

紅「はあ、わかつたよ、よろしくな靈夢」

靈夢「ええ、よろしくね紅」

こうして靈夜紅の物語は始まる

## 紅の能力

紅 「ふあ～もう朝か」

幻想郷に来てから1日が経過した  
博麗神社に住むことになつたのだが、急に何かが起ころはばくもなく  
普通に昨日は寝て終わつた

紅 「おはよう靈夢」

靈夢 「おはよう紅もうすぐご飯ができるから待つてて」

紅 「わかつた」

～10分後～

靈夢 「出来たわよ～」

紅 「おう、ありがとう」

紅 &amp; 靈夢 「どちらさまでした」

紅 「ところで靈夢今日は何をするんだ？」

靈夢 「そうね、今日は弾幕ごつことスペルカードについて説明する  
わ」

紅 「わかつた」

靈夢 「まずは、弾幕ごつこについて説明するわ」

靈夢 「弾幕ごつこって言うのは、人間が妖怪や神様とも同等に力を  
発揮できるために作られた決闘方法よ」

靈夢 「で弾幕ごつこの時に使える必殺技がスペルカードよ」

靈夢 「スペルカードは1回の弾幕ごつこ使えるカードの種類が決め  
られているわ」

紅 「なるほど」

紅 「他には？」

靈夢 「ないわよ」

紅 「することなくなつたな」

靈夢 「そうね」

紅 & 靈夢 「・・・・・」

?? 「おーい靈夢ー」

靈夢 「は～またうるさいのが来たわね」

??? 「おはよう靈夢」

紅 「靈夢こいつは?」

靈夢 「こいつの名前は霧雨魔理沙」

魔理沙 「私の名前は霧雨魔理沙普通の魔法使いだぜ」

紅 「俺の名前は靈夜紅だよろしくな霧雨」

魔理沙 「魔理沙でいいぜ」

紅 「わかつた」

魔理沙 「ところで紅のぬ力つてなんだぜ?」

紅 「能力?」

靈夢 「そういえばまだ見てなかつたわね」

紅 「俺に能力なんてあるのか?」

靈夢 「多分あると思うわよ」

紅 「靈夢達にも能力があるのか?」

靈夢 「ええあるわよ」

靈夢 「私が空を飛ぶ程度の能力で魔理沙が魔法を使う程度の能力

よ」

紅 「へゝ靈夢は空が飛べて魔理沙が魔法をつかえるのか」

靈夢 「ええ、そうね紅の能力も見てみるわね」

紅 「おう、頼んだ」

靈夢 「紅の能力は「ありとあらゆるもの模倣する程度の能力」と  
「ありとあらゆるもの2倍にする程度の能力」よ」

魔理沙 「能力二つ持ちは珍しいのか?」

紅 「能力二つ持ちは珍しいわ」

靈夢 「ええとても珍しいわ」

魔理沙 「なあ紅、私と弾幕ごっこしないか?」

靈夢 「何言つているの?!魔理沙 紅はまだ幻想郷に来てから1日しか経つてないのよ!」

魔理沙 「どうしたんだ靈夢お前がそんなに必死になるなんて珍しいな」

魔理沙 「もしかしてお前紅のことが好きなのか?」

靈夢 「そ、そんなわけがないでしょ!!」

魔理沙「じゃあ、別にいいだろ」

魔理沙「手加減するし大丈夫だよ」

靈夢「で、でも」

紅「靈夢大丈夫だよこれから幻想郷で暮らすなら戦わなきやいけないかもしないしな」

靈夢「はあ、わかつたわよ魔理沙絶対に手加減しなさいよ」

魔理沙「わかってるよ」

## 初めての弾幕ごっこ

魔理沙「なあ、紅お前スペルカードは持っているのか？」

紅「そういうえばまだ持つてなかつた」

靈夢「じやあ、今から作りましようか」

紅「どうやつて作ればいいんだ？」

靈夢「この白紙のカードに自分の作りたいと思うスペルを想像すればいいのよ」

紅「なるほど、早速やつてみるか」

靈夢「はい、これがカードよ」

紅「ありがとう、じやあ作るか」

（10分後）

紅「できた！」

魔理沙「早かつたな」

紅「最初から結構思ついてたからな」

魔理沙「じやあやろうぜ」

靈夢「まんまり派手にやらないのでよ」

魔理沙「わかってるよ」

魔理沙「今回のルールだが、能力ありのスペルカード2枚までだ」

紅「わかった」

靈夢「それじゃあ行くわよ」

靈夢「始め——」

靈夢のスタートの合図とともに魔理沙が箒に乗り空に飛んだ

紅「空を飛ぶのはずるくないか？」

魔理沙「最初に行つただろ能力の使用はありだつて」

そういえば最初に言つていたような気がする

さてどうやつて攻撃しよう

そうだ俺も能力を使えばいいのか

よしそうと決まれば

、能力発動、博麗靈夢 空を飛ぶ程度の能力

紅「おお、飛べたぞ」

魔理沙「早速能力を使つてゐるな」

魔理沙「なら私も」

魔理沙「スペルカード発動、魔符「スター・ダストレヴァリエ」」

魔理沙がそう宣言すると星型の弾幕がこちらに向かつていてどうやつて防ごうかな

とりあえず最高スピード度で飛んで逃げよう

紅「よし、なんとか避けれた」

魔理沙「おお！今の避けたのなかなかやるな」

紅「ギリギリだつたけどな」

魔理沙「ならこれはどうだ！」

魔理沙「スペルカード発動、恋符「マスタースパーク」」

魔理沙がスペルカードを宣言すると極太のレーザーがこちらに向かつてきた

靈夢「魔理沙！流石にそれはやり過ぎよ！」

魔理沙「大丈夫だつて靈夢」

魔理沙は大丈夫と言つてゐるがどうする

スペルカードを使うしかないか

紅「スペルカード発動、絶符「アブソリュートガード」」

俺がそう宣言すると目の前に桜の花の形を大きな盾が現れた

魔理沙「なんだそれ！」

紅「うおおおおおおおおおおお」

紅「なんとか防いだぞ」

魔理沙「おお！すごいなそのスペルカード私のマスタースパークを防ぐなんて」

紅「次はこっちの番だ！」

紅「スペルカード発動、聖符「約束された勝利の剣」」

目の前に大きな剣が魔理沙に向かつて飛んでいつた

魔理沙「うあああああ」

魔理沙「うう、負けたぜ」

靈夢「魔理沙！あんたなんでマスタースパーク打つたのよ」

魔理沙「大丈夫だと思つたんだぜ、結果的に大丈夫だつたからいい

じゃないか

靈夢「全くもう、紅大丈夫?」

紅「ああ、大丈 夫だ」

バタ

靈夢&魔理沙「紅!」

## 紅の武器

目が覚めるとそこは知らない天井だった  
なんてことはなかつた

博麗神社だつた

紅 「あの後どうなつたんだ」  
て  
確かあの後魔理沙のマスタースパークを防いで攻撃スペルを放つ

靈夢 「紅大丈夫かなーって紅！起きてたの！」

紅 「うん、今起きたところだ」

靈夢 「大丈夫なの？」

靈夢が心配そうな顔でこちらを見ている

紅 「ああ、大丈夫だ」

靈夢 「そう、良かつた」

靈夢がほつと胸をなでおろす

紅 「ところで靈夢俺はどれぐらい寝ていた？」

靈夢 「丸一日寝てたわね」

1日かそんなに長くはなかつたな

靈夢 「まずはご飯にしましよう」

靈夢 「その後何があつたか説明するわ」

「少年、少女食事中」

紅 「ふう美味しかつた靈夢は将来いい嫁さんになりそうだな」

靈夢 「そ、そうありがとう」

靈夢が顔を赤らめていう

魔理沙 「おうい靈夢！」

魔理沙が箒に乗つてやつてきた

魔理沙 「お、起きたのか紅」

魔理沙 「もう大丈夫なのか」

紅 「ああ、大丈夫だ」

紅 「あの後何が起きたのか説明してくれないか？」

靈夢 「ええ、いいわよ」

靈夢によると俺が約束された勝利の剣で魔理沙を倒したのは良かったのだが

体力が尽きて意識がなくなつたのだとか

魔理沙「あの時は悪かったな手加減しないでマスタースパークを打つて」

紅「まあ、対処できたし大丈夫だ」

魔理沙「そうかところで紅」

紅「なんだ」

魔理沙「一緒に行つて欲しい場所があるんだ」

魔理沙「お前の話をしたらあつてみたいて行つていたから」

紅「ああ、いいぞ」

魔理沙「じゃあ、今から行くか」

紅「今から?!」

靈夢「行つてきていいわよ」

紅「それじやあ行くか魔理沙」

「少年、少女移動中」

魔理沙「着いたぜ」

紅「香霖堂?」

魔理沙「とり会えず入ろうぜ」

紅「ああ」

魔理沙「邪魔するぜ!」

???「いらつしやい魔理沙」

魔理沙「よう、こーりん」

???「あれ、そちらの子は?」

魔理沙「紹介するぜ、これがこの前話した外の世界から来た紅だ」

紅「靈夜紅です」

???「君が外の世界から來た子か、僕の名前は森近霖之助この店の店主だよろしく紅くん」

紅「ああ、よろしく霖之助」

霖之助「せつかく來てくれたんだ何か干物があれば持つて行つてくれ」

れ

紅「いいのか？」

霖之助「ああ」

紅「じゃあ、遠慮なく」

少し周りを見て何かあるか見てみると日本刀があつた

紅「これは」

霖之助「それは日本刀だね」

紅「わかるのか？霖之助」

霖之助「ああ、僕の能力は「道具の名前と用途がわかる程度の能力」  
だ」

紅「なるほど、じゃあこの刀の名前もわかるのか？」

霖之助「わかるよ、その刀の名前は妖刀「紅桜」」

紅「紅桜、、よしこれに決めた」

霖之助「それでいいのかい？」

紅「ああ」

紅「それじゃあ、霖之助また来るよ」

霖之助「ああ、いつでも来てくれ」

そして、俺たちは博麗神社に帰つていつた

## 紅魔館

武器をゲットしてから1週間がたつた。

1週間の間俺は修行して新しいスペルカードができた

紅「ここに来てから1週間か！」

靈夢「ホント早いものね！」

魔理沙「大変だ靈夢、空が!!」

靈夢「空がどうしたのよつてなによこれ！」

紅「真っ赤だな」

靈夢「これは異変ね」

魔理沙「異変を解決に行こうぜ靈夢」

靈夢「そうね行きましょうか」

紅「俺も行つてもいいか？」

靈夢「別にいいわよ」

紅「ありがとう」

（少年、少女移動中）

靈夢「着いたわね」

???「なんですかあなた達は！」

紅「なんだこのチャイナ服は？」

???「私の名前は紅 美鈴」

魔理沙「名前はいいからここを通させてくれよ」

美鈴「そろは行きませんよ私はここの中番ですから」

靈夢「無理矢理通るしかないわね」

紅「ここは俺にやらせてくれないか」

靈夢「大丈夫なの？」

紅「ああ、倒して俺も合流するだから行け」

靈夢「わかつたわ、行くわよ魔理沙」

魔理沙「ああ」

美鈴「2人通してしまいましたがあなたを倒して追いかけレバいいだけです」

紅「ずいぶん甘く見られてるな」

美鈴「それでは行きます!!」

美鈴がそう言つた瞬間ものすごいスピードでこちらに向かつて来た  
俺はその瞬間紅桜を抜いた

美鈴が右手で殴つてくるが俺はそれを紅桜で防ぐがそれを読んで  
たのか  
左足で蹴つてくる

紅「くつ」

ギリギリそれに反応したが弾幕を打たれる

紅「がつ」

美鈴「私の能力は気を使う程度の能力です」

紅「なるほど俺の気を見て動きを読んでいるのか」

美鈴「正解です」

そう言うと美鈴はすごい速さで殴つたり蹴つたりしてくる

俺はそれを紅桜でなんとか防ぐ

紅「このままだと負けるやるしかない!」

、能力発動、紅 美鈴 気を使う程度の能力

俺は能力を使い美鈴の能力を模倣し気を読む

スペルカード発動、剣符「剣の舞」

俺がそうスペルカードをそう宣言すると周りに7本の剣が現れる

紅「行け!!」

7本の剣が美鈴に襲う  
美鈴「これぐらいなら」

7本の剣が全て折られる

スペルカード発動、剣符「剣の舞」

、能力発動、剣の数を2倍に

剣の数が14本に増える

紅「行くぞ!!」

美鈴に向かつて走る

美鈴「ぐ、これはヤバイですね」

よしこれなら勝てるそう思つていると

美鈴「そろそろ本気で行きますか」

美鈴がさつきの倍の速さでこちらに向かつてきた

紅「速すぎる!!」

攻撃を数発食らう

紅「ぐ、」

、能力発動、スピードを2倍に  
能力を使いスピードを二倍にする

紅「これでも食いやがれ！」

スペルカード発動、聖符「約束された勝利の剣」

美鈴「これは、、ぐわああああ

紅「なんとか倒すことができた」

紅「靈夢達と早く合流しないと」

## 魔理沙V.S.パチュリー

紅に美鈴を任せたあと魔理沙は図書館へ来ていた

魔理沙「こんなにも本が置いてあると図書館は見たことがないぜ」

魔理沙「魔道書も置いてあるしな異変解決の後ここへまたくるか」

魔理沙がそう一人言を言つていると後ろから鼻歌が聞こえてきた

??? 「ふんふふうんって誰ですかあなた?!」

魔理沙「この異変を解決しにきた霧雨魔理沙だ」

???? 「てことは、侵入者ですか?!パチュリー様、大変です侵入者が」

???? 「うるさいわね、なによこあ」

小悪魔「だから侵入者ですってば！」

魔理沙「よう、お前がここの中人か？」

??? 「図書館だけはね、館は違うわよ」

魔理沙「違うのか、まあいつか私の名前は霧雨魔理沙お前は？」

??? 「私の名前はパチュリー・ノーレッジよ」

魔理沙「あいさつも済んだことだし弾幕ごっこで勝負だ！」

魔理沙「私から行くぜ！」

魔理沙はパチュリー目掛けてまっすぐ飛んだ

魔理沙「喰らえ！スペルカード発動、魔符「スターダストレヴァアリ

工二

魔理沙の弾幕はパチュリーに向かつていく

パチュリー「スペルカード発動、日符「ロイヤルフレア」

魔理沙の弾幕はパチュリーのロイヤルフレアにより全てかき消された

魔理沙「畜生、これならどうだ！スペルカード発動、恋符「マスター・スパーク」

マスター・スパークがパチュリーに向かつて放たれる

パチュリー「スペルカード発動、火符「アグニシャイン上級」

魔理沙のマスター・スパークはパチュリーのスペルカードアグニ

シャインによつてかき消される

魔理沙「マスター・スペルカードまできかないとなるとどうするかな」

魔理沙「ううん」

魔理沙「考えていても仕方がないしとりあえず攻撃するか」

魔理沙「スペルカード発動、魔符「スター・ダスト・レヴアリエ」  
パチユリー「また同じ攻撃、何度攻撃してこようともそんな威力の  
ない攻撃すぐにかき消すことができる」

魔理沙「そうかならこれならどうだスペルカード発動、魔符「ス  
ターダスト・レヴアリエ」&恋符「マスター・スペルカード」

魔理沙が二つのスペルカードをほぼ同時に宣言した

パチユリー「これはまずいわねスペルカード発動、火水木金土符  
「賢者の石」

パチユリーの賢者の石によつて二つのスペルカードは虚しく消え  
る

魔理沙「いくぞ！スペルカード発動、恋符「マスター・スペルカード」最  
大出力！」

パチユリー「きやあああああああ

魔理沙のマスター・スペルカードがパチユリーに当たる  
パチユリー「これ以上は無理よ降参するわ」

魔理沙「弾幕はパワーだぜ！」

## 靈夢 V S 哀夜

紅が美鈴と戦っている間に靈夢は紅魔館の主人を探していた

靈夢「主人は一体どこにいるのよ」

靈夢「この館が広すぎるのよ」

??? 「なら私が案内して差し上げますよ?」

靈夢「あなた誰?」

咲夜「私の名前は十六夜咲夜この紅魔館のメイド長しています」

靈夢「メイド長が案内をしてもいいのかしら」

咲夜「ええ 大丈夫ですよただし私に勝てたら案内してあげますよ」

靈夢「それなら遠慮なくやらせてもらうわね」

お札を構えながら咲夜に向かって走る靈夢

靈夢「さつさと終わらせたいから本気で行くわよ」

咲夜「お嬢様のもとにはいかせない!」

靈夢は咲夜に向かつて数枚お札を投げた

それを咲夜は難なく躱す

それでも攻撃を止めない靈夢

靈夢「スペルカード発動、夢符『封魔陣』」

靈夢が咲夜に向けてスペルカードを放つ

その瞬間目の前から咲夜が消えた

咲夜「スペルカード発動、メイド秘技『殺人ドール』」

靈夢はスペルカードをギリギリ避ける

靈夢「どうゆうこと? 確かにさっきまでは目の前にいたはずなのに」

靈夢は必死に考えたどうして目の前から咲夜が消えたのか

咲夜「あらどうしたの? もう終わり?」

靈夢「スペルカード発動、靈符『夢想封印』」

靈夢がスペルカードを放つと目の前から咲夜が消えて自分の背後にいた

靈夢「また背後に?!」

咲夜「あなたの攻撃は当たらないわよ」

靈夢「なんで攻撃があたらないの？」

靈夢は何故攻撃が当たらないのか戦いの中を考えた

咲夜「スペルカード発動、メイド秘技『殺人ドール』

靈夢は攻撃をかわし近距離攻撃を仕掛ける

だがその攻撃は当たらず

咲夜はまた目の前にいなかつた

靈夢「これはもしかして」

咲夜「どうしたの？もう諦めてしまったのかしら？」

靈夢「いいえ、勝利を確信したのよ」

靈夢はまた接近戦に移った

咲夜「そんなことをしても無駄よ」

靈夢「それはどうかしら？」

靈夢がまた攻撃を仕掛けたそれと同時に咲夜が目の前から消え  
後ろから爆発音が轟く

咲夜「どうしてこんなところにお札が」

靈夢「それはさつき私が仕掛けといたものよ」

咲夜「どうしてわかったのよ？」

靈夢「そんなの急に目の前から消えて背後にいたら高速移動か時止めのどつちかじやない」

靈夢「それなら設置型のお札を置いといて引っ掛けかるよう誘導すればいい」

靈夢「そう考えたのよ」

咲夜「そう、私は誘導されていつたていうことね」

靈夢「さあ、主人の部屋を教えてもらうわよ」

咲夜「そうだつたわね、そのまま真っ直ぐ行つて左に曲がれば着く

わよ」

靈夢「もう少しでこの異変も終わるわね